

平成 22 年 4 月 25 日現在

研究種目： 基盤研究 (C)
研究期間： 2007 年度～2010 年度
課題番号： 19530480
研究課題名 (和文) 障害者と芸術活動に関する社会学的研究～社会における自己表現

研究課題名 (英文) The sociological study of handicapped person and art:
expression of self in society

研究代表者

藤澤 三佳 (FUJISAWA MIKA)
京都造形芸術大学・芸術学部・教授
研究者番号： 00259425

研究代表者の専門分野： 社会科学

科研費の分科・細目： 社会学、文化・社会意識

キーワード： 障害者、芸術、自己表現、臨床社会学、芸術社会学

1. 研究計画の概要

本研究は、障害者の芸術活動に関して、調査研究と理論研究の両面から研究をおこなうものである。その目的は、社会における自己表現、社会と芸術との関係性の新しい動きを探求し、医療・福祉と芸術の分野の交差領域にある芸術社会学の調査枠組みを示すことである。「障害」を含めた人間の生の多様性が、芸術という領域においてどのように表現され、社会に提示されているか、またはそれは作者にとっていかなる意味をもち、社会にとってはどのような変化をもたらしているか調査・理論研究により明らかにする。

(1) 調査研究として、精神病院絵画教室及び、摂食障害者の芸術活動に関する参与観察及びインタビュー調査を中心とした質的研究をおこなう。当事者にとっての生活史におけるその意味の分析、その自己表現を見る鑑賞者はどのように感じ、さらにどのような社会的変化がひき起こされるかという点の詳細な分析を研究成果において示す計画である。

(2) 理論研究の側面として、芸術社会学の相互作用論的アプローチ、あるいは「芸術」への相互作用論的アプローチの理論的枠組みを上記調査結果より導出する計画である。また社会における自己表現という観点から研究をおこなうことで、言語的な表現や意味づけに限定されない、多様な表現を把握する計画である。

2. 研究の進捗状況

(1) ①調査研究の側面として、摂食障害の

精神的な症状を示し、生きづらさを抱え、アートによる自己表現をおこなっている人々に対して、絵画、映像の二種類の媒体に関して調査し、下記記載の 4 件の学会報告（「生きづらさを抱える人々の自己表現と自己イメージの変化」他 3 件）において示した。

また、それを自らの境遇をドキュメンタリーを撮ることで自己表現して、症状を克服しようとするプロセスを、論文「セルフドキュメンタリーという自己表現」において分析した。

②精神病院の絵画教室の調査においては、彼らが、絵画表現活動の他、絵画作品の前での作者自身と自己表現との関連に関する語り、創作詩の朗読、音楽等さまざまな自己表現をおこなっている点を明らかにした。特に、当事者にとってのその意味づけや、彼らの社会的自己変容の分析、それを見る鑑賞者がどのように感じ、さらにどのような社会的変化がひき起こされるかという点を詳細に分析し、また、彼らを支える人間的、社会的ネットワーク、また鑑賞者についても調査をおこない、「精神病院における「自己表現」としての絵画活動—H精神病院における絵画活動の事例より—」として学会報告、及び、論文「臨床のアート」においてその結果を示した。

(2) 理論研究の側面においては、障害者と芸術関連の生活史分析をおこなうため、シカゴ学派を源流とする生活史研究の金字塔ともいえるクリフォード・ショウの研究をとりあげ、その調査の理論的枠組み、調査方法論と生活史理論を下記記載論文において検討した。

また、芸術社会学の枠組みに関して、社会と芸術の新しい関係を示す芸術社会学の枠組みを示す目的により、海外や国内の関連文献の収集をおこない、『文化の社会学』において、芸術社会学の創始者であるフランスのピエール・フランカステルの『絵画と社会』に関して考察し、「芸術社会学」を執筆した。

日本社会学会発表「生きづらさと自己表現」(藤澤、2008)において、摂食障害者のセルフドキュメンタリーを創作するなかでの自己表現に関して考察し、論文「臨床のアート」(藤澤、2009)において、精神病院の絵画教室に関して、1960年代から現在までの変遷と、精神障害者の表現の意味、その特徴を分析した。また、彼らがどのような人間関係や社会的ネットワークを形成するなかで、表現行為を続けているのか、彼らの展覧会時の自己とその表現に関して記載した文章からも明らかにした。

上記研究の意義や重要性に関しては、従来、障害者の人間的部分を扱う生活史分析と、芸術的側面を扱う芸術活動、表現内容をリンクさせて考察された研究がみられなかったことから、人間学・心理学・社会学研究と、芸術学研究を交差させて研究をおこなった点であると考え。このようなリンクを通じてはじめて、障害に苦しむ人々が、どのような意味で、いかなる表現行為をおこない、その結果、自己肯定感をもつことが可能となるプロセスが明らかになった点が本年度の研究の重要性である。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

障害者の芸術活動の調査研究において、参与観察、質的調査を中心とした分析を学会報告、論文で明らかにすることができ、また理論研究に関しても、論文、図書においてその結果を示すことができおり、順調に進展している。

4. 今後の研究の推進方策

4年間の研究成果をまとめ、障害者の芸術活動について報告書の作成にむけて研究をすすめたい。さまざまな障害の程度と芸術活動との関連性を明らかにするが、特に、精神障害を中心に考察、分析をおこなう。

今後は、歴史的側面の分析も重視する。H精神病院をとりあげ、40年間という長期間においてどのように変化し、また、そのときの絵画教室が生じる医療・福祉の場における1960年代の文化・芸術的状況の創成期、絵画教室という集団の役割、指導者やメンバー間の関係、鑑賞者や支援者の果たしている役割

を中心にして分析をおこなう。

また、国内の状況と、海外における障害者の芸術活動との比較研究をおこなう。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

①藤澤三佳、臨床のアート、社会臨床雑誌、社会臨床学会編、査読(有)、16巻、42頁～50頁、2009年

②藤澤三佳、1920年代における非行少年「自身」の物語、社会臨床雑誌、社会臨床学会編、査読(有)、16巻、110頁～115頁、2008年

③藤澤三佳、セルフドキュメンタリーという自己表現、社会臨床雑誌、社会臨床学会編、査読(有)、15巻、86頁～88頁、2007年

〔学会発表〕(計5件)

①藤澤三佳、精神病院における「自己表現」としての絵画活動—H精神病院における絵画活動の事例より—、2009年10月12日、立教大学

②藤澤三佳、生きづらさと自己表現、日本社会学会、2008年11月24日、東北大学

③藤澤三佳、生きづらさを感じる人々による自己表現～アートやセルフドキュメンタリーによる、日本社会学会、2007年11月17日、関東学院大学

④藤澤三佳、生きづらさを抱える若者がアートによって自己表現するということ、日本臨床心理学会、2007年9月7日、立教大学

⑤藤澤三佳、生きづらさを感じる人々の自己表現を自己イメージの変化、関西社会学会、2007年5月27日、同志社大学

〔図書〕(計1件)

藤澤三佳、「芸術社会学」、井上俊、伊藤公雄編、『文化の社会学』、世界思想社、2009年、7月31日、219頁～228頁